

東京都景観計画の研究 -東京の姿形について考える-

代表 戸沼幸市（早稲田大学 名誉教授）

委員 松本泰生（早稲田大学理工学術院 客員研究員）

〔研究報告要旨〕

現在の東京都は関東平野一杯に広がった巨大都市・世界都市の主要な一部である。都心部（23区）は大東京の中心部であり、政治・経済・文化の中核機能が集中している。

しかし、日本全体の劇的人口減に合わせて東京圏の人口も安定ないし縮小に向かうと予測されている。また、都市成立の基盤をなすエネルギーについても地球温暖化の直接の原因をなす化石燃料の多消費から、自然エネルギー系を大きく取り込んだものに向かっている。

この大東京の21世紀前半のイメージをいえば、“新生態系都市東京”として成熟期に向かうと考える。

東京都の景観は、江戸・明治・大正・昭和・平成と400年の歴史を重ねたものであり、時代々々の人々の営みが記憶されている。これらについて注意深く観察し、優れたものを残すことは東京都景観計画の大きな役割である。

景観行政については、それが単独で成り立つものではなく、都市計画、地区計画、緑計画、文化財保護、建築計画、広告行政などと強く関連している。

都市マスタープランと連動する景観マスタープランづくりに合わせて、各種関連審議会が情報を共有することが望ましい。

都市づくり、都市景観づくりの主体は市民であり、業界各種団体である。行政側はこれら主体の意向を時代の流れの中で見極め、適確にその役割を果たすことが求められている。

東京都では、他都市に先駆け、東京都景観計画を策定し、鋭意この問題に取り組んできた。研究代表者は、当初から東京都景観審議会会長としてこの計画立案に関与してきたが、本研究はこの10年間の審議経過を振り返り、これを総括し、都市景観の課題とその展開について、いくつかの提案を含め考察したものである。